105 誌上発表　『針別伝奥義之次第』について

岩田源太郎
日本鍼灸研究会

内藤記念くすり博物館所蔵の『針別伝奥義之次第』（函架番号01578-492.7. 以下『奥義之次第』と略称）は，江戸期の鍼灸書であるが，その内容は知られてない．よって，本書の内容を検討し，江戸期鍼灸研究の一助としたい．

本書は写本で，全72葉からなる．題箋には「針伝秘要」とあるが，内題は「針別伝奥義之次第」となっている．序跋はなく，著者，成書年共に不明ではあるが，本書末の識語に「右山田道意，病中執筆．示門人而已，今又是瀉取．寛政九巳孟春.」とあることから，山田道意が執筆した原書を，寛政九年（1797）に転写したものであることがうかがえる．

『奥義之次第』は，大きく前後に大別される．前半は，鍼の手技，主治穴などの臨床に関することが書かれ，後半は「鍼道開目」と題し，臨床に関して配慮すべき事項が述べられている．ただし，前半の最後に「奥伝終」の一行があることから，後半の「鍼道開目」については，のちに原書に追加されたものである可能性も考えられる．

『奥義之次第』の中核を為す「奥伝」の内容は，二つに分けられる．その前半では門人全般に対するものとして，8項目74条にわたって，鍼術の基本と鍼治療における主治穴などが書かれ，これに続く後半は「別伝之事」と題され，上級者向けの内容として，5項目133条にわたって主治穴が述べられている．なお本書で取り上げられている鍼灸法は鍼法のみで，灸法については一切触れられていない．また，経絡についての記載も見られない．加えて，引用文献名も全く見られず，人名については，「鍼道開目」に「黄帝」「岐伯」が見られるのみである．

本書に挙げられている主治穴は133穴で，その内訳は，正穴が50穴，奇穴など正穴に属さない穴が83穴であった．この83穴のうちには，通行の経穴書には見ることの無い「七燿」「中順」「野一言」等の穴名が含まれている．取穴法は鼇頭に付されているが，正穴以外のほとんどの穴では，簡単な部位を記すにとどまっている..

主治穴のうち，最も所出回数の多いものは，章門穴の19回で，次いで中脘穴の15回，足三里穴の12回，天枢穴の9回と続く．このことからも，本書では腹部や体前面の穴を重視していたことがうかがえる．

『奥義之次第』は，100穴前後の主治穴を症状に対して用いる，通行の経穴書には見られない特異な穴名が散見する，経絡などの理論は用いず，専ら鍼法を重視するなどの特徴から，江戸初期の流派鍼灸書であると考えられる．

この『奥義之次第』が，江戸初期流派のどの系統に属しているか，山田道意の伝などについては，今後の検討課題としたい．